

末黒野

すぐろの

4月号 (通巻764号)

末黒野

昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可(毎月一回五日発行)
平成二十二年四月五日発行(第六十五巻第四号)

(通巻七六四号)



初
笑

小川玉泉

身に添ふは風音ばかり堤枯る
隙間風妻の寢息の正しさよ
川岸の外灯暗し空つ風
霜解けの日の眩しさの青菜畑

輪飾の幣の白さの外流し
挽歌めく夜の波音年惜しむ
天心に月満ち年の立ちにけり
雨戸開け大きく息を初御空
初笑歩み初めたる曾孫の来て
筆始色紙いっぱい和の一字
先づ妻へ黄身の色濃き寒卵
風落ちて池面の捉ふ寒の月

基地の海

松本三千夫

鳥ごゑも包み若水掬ひけり
初雀一羽の発てば二羽の来て
潮の香の居座る路地や初詣
寒椿海は島より昏れて行き
蘆枯れて血脈のごと川流る
探梅やときに潮の香とくに富士
日脚伸ぶ笑ひ羅漢の深ゑくぼ
大寒の空の深さを沼湛ふ
鳶統ぶる島人住まず四温晴
日はとろり崎をなだるる野水仙
同姓の墓の立派や竜の玉
雲寄せぬ冬日や基地の海たひら

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

臘梅

黒滝志麻子

冬紅葉映して湖の碧さかな
奥社への道をせばめて年木積む
安曇野のつるの夜風や干菜風呂
僧坊や朝の影引く枯牡丹
輪飾や船霊やどる操舵室
読初と言へど去年の葉より
日向へと羽音の揃ふ初雀
青竹の揃ひの酒器の淑気かな
若水や胃の腑に落す飲み菓
臘梅や肌刺す風の蔵の街

小夜時雨

田中臥石



海離れてのひらに載る初日かな
一合の屠蘇に酔ひけり飾り虎
堀のなき石屋の仕事始かな
太梁と大黒柱土間冷ゆる
娘より届く太巻き恵方寿司
石神井川涸れぬ王子の並木道
寒夕日肅然として波郷師碑
深大寺の蕎麦啜りをり小夜時雨
左義長の火明かりに浮く己が顔
寒の水ごくりと動く喉仏

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

初景色

乙坂きみ子

宿を出て十歩の富士を初景色
無人なる灯台なれど松飾
潮騒に近々とみて野水仙
ゴンドラの影落しゆく冬日和
探梅や潮風匂ふ切通し
竹林の風に狂へる寒暮かな
蒼きまま夜に入る深空枯木山

初春

菅野日出子

点描のさまに落葉の錦かな
数へ日やほろ酔ひに買ふ宝くじ
おぼろげな面輪いくたり賀状書く
掃き終へて衣桁に広ぐ子の春着
満月の光たよりの初詣
夫逝きて仕来り薄る雑煮膳
初春や恋知りそめし孫娘



寒

菅野蒔子

嫁と祝ぐ姑より継ぎし雑煮椀
七草へ夫の好みし小松菜も
着ぶくれて決断力のにぶりけり
しなやかな仕草に無縁重ね着て
暖炉つけ炬燵に入り籠りをり
櫛一樹に倚れる鴉や寒夕べ
食後呑む菓に慣れず寒に入る

冬さうび

木下和代

枯菊を焚くや炎の香をのせて
心電図の不規則の波冬さうび
着ぶくれて固き決心弛みけり
教会の聖樹最もつつましき
数へ日の街人波に溺れけり
時どきの心覗かせ日記果つ
稜線の大き残月年の朝

短

日

熊切光子

耳遠きことには触れず日向ぼこ
虎落笛塀の落書消えぬまま
引く波に総身のすくむ寒さかな
短日や籠の目白の落ち着かず
ひと抱へほどの築山霜柱
齒切れよき女将の語り鮫鱈鍋
初東風や道を狭むる一里塚

初

春

小山紫乃布

あらたまの朝日の力汝が上に
玉砂利を踏む音さへも淑氣満つ
独身者のみの止り木初商
豆腐屋の笛間延びして五日かな
初春の星のコーラス山上湖
冬岬星呼び合うて近づきて
化粧なき顔で一日寒波来る

岨の径

岡野里子

一 湾の春光廻す風車かな
押し出だし流れにのせて雛送る
剪定の空や広ごる風の道
湿原の風の自在に芦若葉
茶摘籠負ひてみどりの畑へ立つ
真つ新たな茅の輪を風とくぐりけり
よみがへる湾の波音花火果つ
黎明の茜の空や鳥渡る
対岸の灯ほつほつ水の秋
笠ぬちのあぎと美し風の盆
おわら節二百十日の風のり
落葉より現る伏流岨の径
干大根野面の風を引き寄せ
雨脚の大路に弾み春隣
篝火のひときは盛り年新た

百千鳥

嘉住きよ美

春寒し幼の十指掌で包み
百千鳥囀す山家の目覚かな
春の灯やみ仏なれどなまめかし
源流は雲浮くあたり青き踏む
書いて消す句帳の湿り梅雨深む
美術館いでて上野の西日濃し
鮎を食ぶいつか自慢の釣談議
水際を白に染めたる花菖蒲
卵塔につかずはなれず夏の蝶
さはさはと玉解く芭蕉月照らす
野仏の肘まろやかや秋の風
爽やかや注連新らしき御神木
里山のかはたれ時を雁の声
白梅の古木なれども花充てり
老の身にダウンコートの温きかな

黄心樹

鈴木礼子

屋上の湯屋に月光の春の海
潮騒を窓に珈琲暖かし
見晴るかす眼下の街へ落花かな
畝立ての土のぬくもり初蛙
里桜上総の空の日本晴
外つ国の言葉飛び交ふ花堤
花筏乱す軽鴨浜離宮
黄心樹の花に触るや風匂ふ
草刈つて青き匂ひを纏ひけり
潮騒の田を渡り来ぬ籠枕
日差濃し廊下を走る瑠璃蜥
夕づくや蒲の穂揺る棄て田圃
野牡丹の色を深めて昏れにけり
台風を通りし庭の木屑
藤の実の裂くる音せる寒日和

ほととぎす

中山良子

音もなく紅梅に雨立子の忌
舍利殿の光る九輪や花の雲
ほととぎす御陵の杜の何処より
大甕に朴の花活け無人駅
神苑の茶屋の灯鹿の親子臥す
点滅の光の柔し初蛩
白樺の風の葉擦れや夏の月
風鈴や雨遣り過す芭蕉庵
星空へ芋殻の炎光り合ふ
空澄めり鳥居に嵌る畝傍山
山の端の雲の行方や紅葉狩
高空に透けて桂の黄葉かな
山寺を昏れて下りぬ冬桜
底石を洗ふて放水池普請
寒月の明るき庭の静寂かな

寒九の水

三橋玲子

聞き留めし初音の径を戻りけり
くくり桑解かるる村の息吹かな
出不精の花人となる日和かな
ハイカーの声の賑はふ新樹どき
袖垣の裡より香る忍冬
しゃぼん玉みなとみらいの空に染む
老鶯の間遠き次の声待てり
ふと出づる口笛郷の植田道
夏服や女子高生の脛長し
釣人の時止まるかに鮎の川
臑を張りて土用の弓稽古
鈴鳴らし子供神輿の弾みけり
初顔の訛の温し芋煮会
ありありと寒九の水の肚に沁む
朝練のサッカーの子ら息白し

山 桜

森 清 堯

石 棺 の 蓋 の 湿 り や 落 椿
 あ は 雪 と 大 書 の 掛 字 雛 の 間
 一 山 の 要 と な り ぬ 山 桜
 山 藤 の 花 の 滝 な す 切 通 し
 職 を 退 く 節 目 迎 へ ぬ 若 葉 風
 さ は さ は と 風 紋 見 す る 青 田 か な
 三 尺 の 水 芭 蕉 の 葉 糸 蜻 蛉
 禅 寺 の 箒 目 乱 し 榎 檀 の 実
 鳴 き 竜 を 再 び 鳴 か せ 秋 惜 し む
 臘 梅 の 影 を 重 ぬ る 寺 苑 か な
 寒 の 水 透 け て 柁 目 の 杓 の 底
 園 児 ら の 頬 の ほ て り や 寒 の 梅
 大 寒 の 富 士 や 十 日 の 明 け の 月
 房 総 の 稜 線 極 め 初 日 の 出
 若 水 を 木 の 香 の 杓 へ 明 け 烏

鹿の声



森清堯

秋暑し白の音こもる水車小屋
湧水をふふみし後の新豆腐
千屈菜や八橋に添ふ水の音
松虫草わづかに残す日の匂ひ
手庇の眼下夕日の芒原
蝸の下山をせかす高音かな
秋蝶の木椅子に惜しむ日差かな
畦道の暮色を焦がし曼珠沙華

千段の磴登りきり鵙の贅
谿径の絡む走り根鹿の声
棧道や瀬音をまとふ杜鵑草
夕さりの富士の笠雲榎櫃の実
竜骨を残す捨舟石たたき
境内の声に誘はれ菊花展
大樟の根の嚙む岩や鵙猛る
湖の群青深め鳥渡る
圈谷の大岩白しななかまど
魯田の勢ひを残し丈五寸
峡の湯の日暮うながす添水かな
田仕舞の煙に噎せて無人駅

年間優秀賞（平成二十一年）

乙矢集

優秀賞

古雑誌括る残暑をくぐるごと

松田 泰子

青炎集

優秀賞

寒の水透けて柂目の杓の底

森清 堯

耕土集

優秀賞

卓上の塩入れ替へて梅雨の明け

鈴木 一恵

万 仞 集

添書にぬくもりこぼれ年賀状	着ぶくれて共に気付かぬ待合せ	冬帝を睨む老舗の鬼瓦	枯野原伏しても春を待つ形	地下街の華や聖夜のケーキ売り	面竈れしたる賀状の戻りけり	冬満月引く波白き桂浜	やはらかに地を這ふ日差し冬はこべ	枯芝に草の弾力ありにけり	劍玉のかわける音やちゃんちゃんこ
田村加代	橋本章	大川暉美	福田房子	菊池善江	岡本鳩舎	美田茂子	熊切修	辻井ミナミ	大内由紀

角材の手斧始の木遣かな	杉山弥生
激つ瀬に引き込まれぬ寒さかな	旗島嘉則
白菜の嵩を沈めて鍋滾る	浅川幸代
昆布巻の帯の崩るる五日かな	饗庭恵子
座布団のふくらんでをり冬座敷	小田嶋正敏
寒の水呑んで登るや男坂	男澤榮男
床屋より夫へ時刻と年の暮	倉橋千代子
頑に五年連用日記買ふ	荒井吉一
初鏡背筋しゃきつと伸しけり	早川芳子
褒め言葉添へて手渡すお年玉	加藤八重子

巨林抄

抽出しにしまふ歲月古日記	少年の素振りのバツト冬木の芽	ぼる市の売手どつかとぼるの中	牡蠣雑炊目鼻一つになる齡	身は杖に影は落葉に委ねけり	うたたねの片頬冷ゆる寒九かな	白寿なる母の軽さや初湯殿	撰氏二度のデジタル表示街師走	水涸れて小さき空も失せにけり	足るを知る老いの暮しや七日粥	約 <small>3</small> まりし腸屠蘇の滲みとほる	岩礁の磯風育つ野水仙
斉藤雅子	及川照子	神谷さうび	芝孝子	中島ひろし	半沢一枝	石井勇	上月智子	村田慶子	藤田千枝子	土屋実郎	澤田澄子

耕 土 集

松本三千夫選



芝 孝子

頂に昼月かかげ山眠る
冬深き山の端に落つ昼の月
手袋を噛みて脱ぐ癖改札口
世の中へ目を剝く仁王冬木立
抽出しにしまふ歳月古日記

横 浜 斉藤 雅子

牡蠣雑炊目鼻一つになる齡
やり直す齡も過ぎて煮大根
しばらくを脱ぎし春着の中にをり
羽子日和昔の音の戻りけり
福寿草はらから似たる指かたち

中島ひろし

少年の素据りバット冬木の芽
小寒や朝餉の漬菜はりと噛む
初曆飾る師の句や日は燦々
煮凝りや会津塗り箸光り合ふ
綿入れを着て余生てふ顔となり

及川 照子

身は杖に影は落葉に委ねけり
北風の棲む厨にガスの華咲ける
短日は小さき万歩計使ふ
血圧は常の振幅去年今年
河豚刺にうつすら透くる柿右衛門

半沢 一枝

御簾のうち灯して禰宜の煤払
煤掃きの間も神鈴の鳴りどほし
ぼろ市の売手どっかどぼろの中
独り居のひとりに適ふ年用意
歳末や客引く声の絡み合ひ

神谷さうび

初漁の船団雄雄し潮境
糟漬に酔ふ義弟をり初笑ひ
口遊ぶ俎板歌や七日粥
うたたねの片頬冷ゆる寒九かな
志ん生の話芸しみじみ女正月